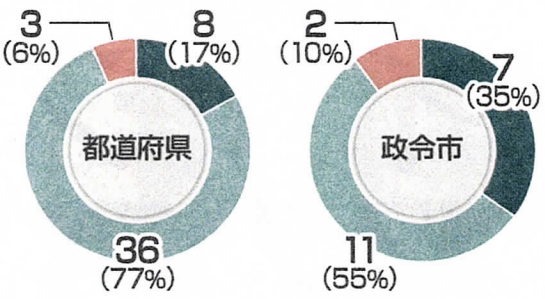
中日新聞　2023年1月1日（日）１面記事
なお、この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

中日新聞　2023年（令和５年）1月1日（日曜日）

養護教諭増 9割超「必要」

本紙 教委調査 子の問題多様化

一人勤務が大半となっている公立小中学校の養護教諭を巡り、全国の四十七都道府県と二十政令指定都市の教育委員会を対象に実施した本紙のアンケートで、九割超が増員を必要と考えていることが分かった。不登校や虐待、発達障害など子どもが抱える問題が多様化していることに加え、新型コロナウイルス対応で業務が増えていることが背景にある。＝連載「ロストチャイルド」㊳㊴面



コロナ対応も負担に

養護教諭は全学年で三学級以上の小中学校に配置され、人数は教員の定数算定などを決めた義務標準法で定められている。二人が常勤する複数配置は、小学校が児童八百五十一人以上、中学校は生徒八百一人以上が条件。文部科学省はこれとは別に、いじめ対応などの課題のある学校に対し、全国で四百十五人（二〇二二年度）を追加で配置している。

養護教諭　学校教育法で「養護教諭は、児童の養護をつかさどる」と規定され、文部科学省は職務として①保健管理②保健教育③健康相談④保健室経営⑤保健組織活動（地域連携など）―を挙げる。学校基本調査（2022年度）によると、全国の国公私立を合わせた小中学校計2万9173校に対し、養護教諭は2万8932人。他に都道府県教委が臨時免許で採用し、養護教諭を補佐する養護助教諭が2447人いる。22年度採用の養護教諭は1263人で、倍率は7・2倍だった。

アンケートでは、現在の複数配置に関して四十四都道府県と十八政令市、計六十二教委（93％）が「拡大、基準緩和が必要」と回答。このうち愛知、長野、滋賀など八府県と、名古屋、浜松、横浜など七市が独自に基準や制度を設け、養護教諭を追加で配置していた。

「拡大、基準緩和の必要はない」との回答は福島、山口、大分の三県と、さいたま、福岡の二市、計五教委にとどまった。

国への要望を自由記述で尋ねたところ、福井県は「少子化により児童生徒数は減少しているが、起こる問題は多様で、養護教諭の負担は増大している」と指摘。滋賀県も「命にかかわるサインを察知するなど教育相談に関する期待は大きくなっている」と複数配置基準の引き下げを求めた。

静岡県は「比較的規模の大きい学校でも一人配置であるため、（養護教諭が）十分に力を発揮できない状況にある」と強調。新型コロナウイルスの流行を受けて「感染症対策において学校保健の中心である養護教諭の役割や負担はますます大きくなっている」（京都府）との意見もあった。

養護教諭の複数配置は、児童生徒の心のケアや保健指導に一人では対応できなくなっていたことを踏まえ一九九三年の義務標準法改正で導入。二〇〇一年の改正で現在の基準となって以降、変更されていない。全国養護教諭連絡協議会などは繰り返し、文科省に複数配置の拡充を要望している。

複数配置基準の緩和などを求める教委が九割を超えた本紙のアンケート結果について、文科省の担当者は「これまでも計画的に配置改善を図ってきた。近年、複数配置基準の緩和はできていないが、心身の健康に対応するため追加的に措置している」と話した。

アンケートは昨年十二月に書面で実施。すべての都道府県と政令市が回答した。

中部9県3市教育委員会の主な回答

	独自配置の有無	国への要望（自由記述、一部抜粋）
愛知県	○	児童生徒の健康管理や衛生管理、手洗い指導などの保健教育を行うため、複数配置の拡大を図ってほしい
岐阜県	×	複数配置基準の緩和
三重県	×	すべての学校への配置や複数配置の拡大
長野県	○	さらに複数配置の基準を緩和してほしい
滋賀県	○	個々の児童生徒を取り巻く情勢は多様で複雑になり、命にかかわるサインを察知するなど（養護教諭への）期待は大きくなっている
福井県	×	児童生徒に起こる問題は多様で、養護教諭の負担は増大している。現状にあった配置基準に
石川県	×	記述なし
富山県	×	国の複数配置の基準の緩和
静岡県	×	いじめや不登校への対応等、比較的規模の大きい学校でも1人配置で十分に力を発揮できない状況
名古屋市	○	複数配置基準を引き下げてほしい
浜松市	○	基準を引き下げ、複数配置の拡充を図ってほしい
静岡市	×	複数配置基準を引き下げてほしい

中日新聞　2023年1月1日（日）社会面／38・39面記事
なお、この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

「子ども」をテーマに

小さな男の子を連れて雪の街を歩く家族とすれ違いました。解けない雪が道に残り、母親がしっかり手を握っていました。

滑らないように、転ばないように。でも、そばにいて注意していても、子どもたちは時々つまずきそうになります。握られる手の温かさを知らない子もいます。その姿や声に、どうしたら気がつけるでしょうか。

政府は四月、こども家庭庁を創設します。国としての本腰を期待しますが、担当の省庁が異なる幼稚園と保育所の一元化では、議員を巻き込んだ綱の引き合いがありました。利害が絡んでいるのでしょうか、政策の政治利用を疑わせます。

一方で、対策は待ったなしです。昨年の年間出生数は、統計開始から初めて八十万人を下回る見通しです。逆に、全国の児童相談所が二〇二一年度に対応した虐待相談は約二十万七千件に上り、統計が始まった一九九〇年度から三十一年連続の増加でした。窓口は増えていますが、虐待で子どもが犠牲になる事件は今も絶えません。

子どもをみる。その意味を考えるとき、「看る」という漢字が浮かびます。差し伸べる「手」と、まなざしを向ける「目」。つまずいた子や転んでしまった子がいるのは、特別なことではありません。保護者や先生に限らず、周囲や社会が子どもたちをどう看ていけるのか。それを考えることが大事なのだと思います。

連載「ロストチャイルド」だけでなく、「子ども」の取材に力を注ぐ年にします。実態と制度の食い違いをあぶり出すニュース、特別養子縁組で父親になった記者の手記…。読者の皆さんからの意見や提案も反映させていきます。

寄り添うことだけが目的ではありません。事実を知り、考え、解決に近づいていくための報道です。

社会部長　青柳知敏

分からない　教室嫌い

ロストチャイルド　第1部　保健室から

葛藤　1

女子児童がいすに座り、顔を両手にうずめていた保健室＝いずれも愛知県内で

四時間目の始まりを告げるチャイムが鳴った。運動場を走る子どもの声が聞こえてくる。昨年十二月、愛知県の住宅街にある小学校の保健室。円柱型のガスストーブの横で、いすに座った女子児童が両手に顔をうずめていた。教室では算数のテストが始まっていた。

女子児童は五年生。学校に来るのは週に半分ほどだ。登校しても教室に入るのは、好きな科目の授業や給食の時だけ。この日も友達と花壇に水をやった後、保健室に来た。養護教諭はパソコンの来室記録で「保健室登校」にチェックを入れ、国語の課題などに取り組む姿を見守った。

女子児童は算数のテストを受けるつもりだった。「面積の授業、頑張ってたじゃん。不安になっちゃった？」。養護教諭が問いかけても反応はない。しばらくすると扉が開き、「気持ち悪いです」と男子児童が入ってきた。

養護教諭が振り返り、「朝ごはんは食べた？」と聞き取りを始めた。すると、女子児童は中庭に出た。もう一人の養護教諭が後を追う。児童数が八百五十人を超える大規模校のため、二人態勢で子どもたちに対応している。

中庭に出た女子児童が帰ってきたのは五分後。少し表情は和らいでいる。一緒に戻った養護教諭が傍らに座り、「算数のテスト、行けそうだったのに、なんで踏み出せなかったかな？」と改めて聞いた。

「知らない」。女子児童は素っ気なく答えて、続けた。「正直言ってさ、自分の気持ちって難しくない？　だから、どうしてって聞かれても分からない」

習い事の武道には欠かさず通い、もうすぐ黒帯という腕前。朝早い遅延も気にならない。保健室では、課題をしながら動画投稿アプリ「TikTok（ティックトック）」で流行っている歌を口ずさんだり、下級生の世話をしたりする。でも―。

「教室、大っ嫌い。知らんうちに嫌いになってた」

理由は分からないと繰り返す女子児童。保健室で過ごす中で「教室のシーンとしている時間が耐えられない」と漏らしたこともあった。じっとしているのが苦手で、周りの評価を気にするところがある。保健室登校で勉強が遅れているため、自分を認めてもらえる場面が教室にはない。「がんばって行こうとしても不安が大きくなり、葛藤している」。養護教諭には、女子児童の姿がそう映る。

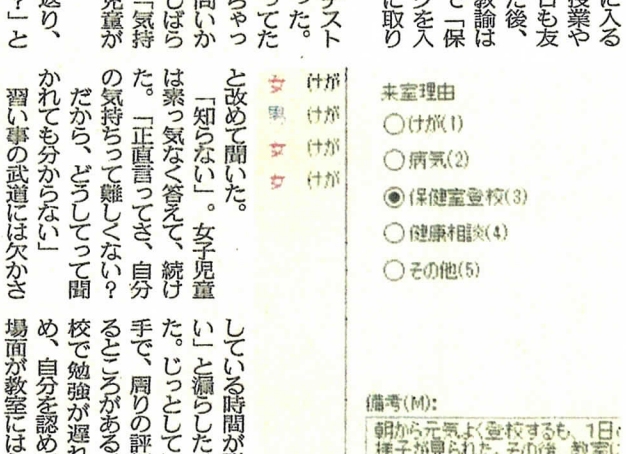
教室に行けない児童は、この女子だけではない。理由が分かれば、対処法は考えやすい。だが「行けない子の大半が、分からないと答える」。子どもを支えるには、保健室での様子や担任の報告などから原因を探るしかない。

女子児童はこの日、給食も保健室で食べ、最後の五時間目を迎えた。「クラスで悪口を言われた」という六年生の女子が入ってくると、二人はストーブを囲んで話し始めた。「明日、一緒に登校して、作戦会議をしよう」。意気投合すると、終業のチャイムが鳴った。

下校時間。校門に立つ養護教諭の前を、さっきまで保健室にいた二人が通りかかった。「また明日」と声をかけると、女子児童は振り返り、「さようなら」。少しだけ、はにかんだ。

◇

さまざまな悩みを持つ子どもが集まる保健室。教室や家庭から隔てられた部屋に響く心の声に耳を傾ければ、社会が向き合うべき課題が見えてくる。連載「ロストチャイルド」の第一部では、小中学校の保健室や養護教諭の姿を通して、子どもたちが抱える息苦しさを考える。（この連載は全五回です）



養護教諭がパソコンに入力する女子児童の来室記録。「保健室登校」にチェックが入っていた

子どもを守り、迷子（ロストチャイルド）を置き去りにしないために

ご意見・体験談をお寄せください

LINE　友だちに追加してください

メール
kodomo@chunichi.co.jp
ファクス
052(201)4331
〒460-8511（住所不要）
中日新聞社会部
子ども取材班

中日新聞　2023年1月3日（火）社会面／27面記事
なお、この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

新聞　（第3種郵便物認可）

「無理」親に言えない

ロストチャイルド　第1部 保健室から

2　逡巡（しゅんじゅん）

「ちょっとのどが変です。熱があるかも」。昨年十一月下旬の昼下がり。東海地方にある小学校の保健室に、高学年の男子児童が入ってきた。熱を測ると、三六・九度。養護教諭は「少し横になって様子を見ようか」とカーテンで隔てられたベッドに促した。

タオルケットにくるまった男子児童は、すぐに眠りに落ちた。一時間ほどで目を覚まして起き上がると、「たぶん、大丈夫です」。すました様子で話した。

どこにでもありそうな、保健室の光景。だが、男子児童にとっては欠かせない時間だ。

一、二カ月に一度、決まって午後の休み時間にやってくる。「なんか変。調子が悪いかも」。訴えはいつも、曖昧だ。元気はないが、具合が悪そうにも見えない。

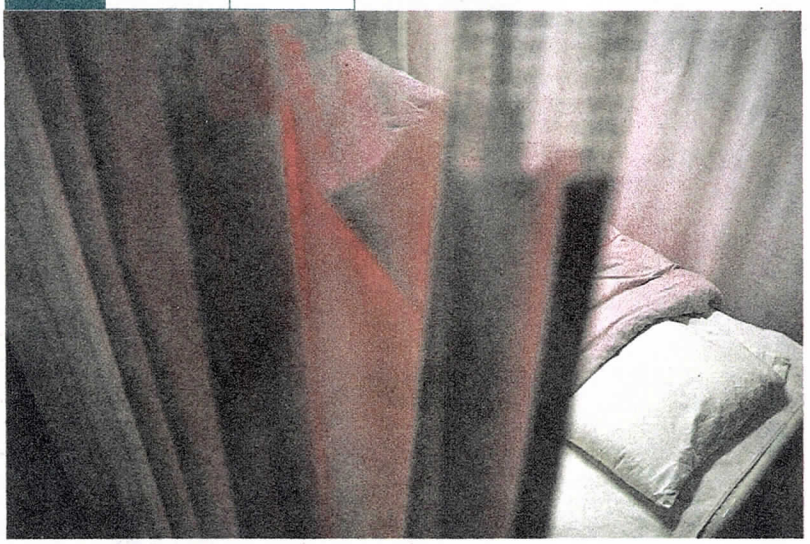
うつむいてぼそぼそと話す男子児童の姿から、養護教諭は「一息つきたいんだろうな」と休ませる。「もうちょっと頑張ろうか」と励ましたり、「本当はどうしたいの」と問いただしたりはしない。

普段は活発な男の子だ。休み時間には友達と運動場で遊び、放課後はスポーツ教室や塾などの習い事をこなす。両親は学校行事や懇談会に欠かさず参加しており、教育に熱心だ。

男子児童が保健室で休んだ時は、学校から保護者に連絡する。この日も担任が電話すると、母親は言った。「熱がないなら、そのままやらせてください」

男子児童は学校の後、スポーツ教室に行く予定だった。養護教諭に「習い事には行けそうかな」と聞かれると、「たぶん、無理です」と自信なさげに答えた。「自分でお母さんに言えるかな」との問いかけには、「うーん」と言ったまま、うつむいた。

男子児童が訪れた保健室のベッド＝東海地方の小学校で



その三週間ほど前。養護教諭は同じ問いかけを別の子どもにしていた。歩きにくそうにして保健室に入ってきた女子児童。「足が痛いです」。靴下を脱ぐと、足の指に傷があった。

「家の人に話した？　病院に行こうという話にならなかったの？」。手当てをしながら養護教諭が聞くと、女子児童は「一回は言ったんだけど…」と言葉を濁した。「あんまり言うと、お母さんに悪いから」

働きながら自分を育ててくれている母親。疲れて帰宅しても、女子児童が友達とけんかして落ち込んでいると、「何かあったの」と気付いて、話を聞いてくれる。

女子児童も母親を気遣い、毎日進んで手伝いをする。「お皿を洗ったり、洗濯物をたたんだりするのは私の仕事なんだよ」。以前、養護教諭に得意げに話したこともあった。

心配をかけたくなくて、痛くても黙っていたのだろうか。指の傷はうんで、赤く腫れていた。「家でちゃんと話してね」。養護教諭がそう諭すと、「うーん、でも嫌だなあ」と困ったような顔をした。

遠慮なのか、気遣いなのか、期待に応えたい思いなのか。心や体が痛んでいても、親に言い出せない子どもがいる。

子どもを守り、迷子（ロストチャイルド）を置き去りにしないために

ご意見・体験談をお寄せください

LINE　友だちに追加してください

メール
kodomo@chunichi.co.jp
ファクス
052(201)4331
〒460-8511（住所不要）
中日新聞社会部
子ども取材班

中日新聞　2023年1月4日（水）社会面／23面記事
なお、この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

薬「楽になりたくて」

ロストチャイルド　第1部　保健室から

3　逃避

夜中に眠れなくなった女子生徒は、自宅の薬箱から鎮痛剤とせき止めの錠剤を取り出した。水と一緒に、口に含む。飲み込んだ後に訪れる「ふわふわっとする感覚」で、悩みから解放されたかった。

東海地方の中学校に通っていた女子生徒。ちゃめっ気があり、クラスメートから慕われていた。授業も部活も、真剣に取り組む。

だが二年生になると、小学校からの仲良しグループの友達が、授業を抜けだし、喫煙や夜遊びを始めた。関わろうとしない女子生徒は「まじめでつまんない」「いい子ぶってるよね」と言われるようになった。

一緒にいるのも、友達に合わせて悪ぶってみせるのもつらい。関係を絶つこともできないうちに、新しい友達ともぎくしゃくし始めた。学校ではやせ我慢の笑顔でやり過ごしていたが、心の中では逃げ出したくなっていた。

母親に相談すると、「他の子だって、いろいろあっても頑張っているんだから」。励ましてくれたのかもしれないが、女子生徒は突き放されたように感じた。

誰も信頼できない。仲良くしてきた友達を遠ざけようとする自分は最低だ。

「自分なんかこの世からいなくなればいい」

消えたい。でも、死ぬのは怖い。思い悩んで眠れなくなっていた二年生の二学期。スマートフォンで「薬を飲むと、楽になるよ」と勧める動画を見た。半信半疑で、家にあった市販の鎮痛剤を何錠か、飲んでみた。

「気持ちが軽くなった」。初めての感覚。体に悪いと思っても、眠れなくなると薬に手が伸びるようになった。

薬物を過剰に摂取する、オーバードーズ。苦痛を和らげられるからと若者にも広がる。だが、その副作用は心と体をむしばむ。

三学期が始まって間もないある日の夜。女子生徒はいつものように薬を飲んだ。

翌日の朝。登校してすぐに、保健室の扉を開けた。

「気持ちが悪い」。養護教諭は当時の様子を「顔色が悪く、とろんとしていた」とノートに記録している。

「寝不足で、調子が悪い」と訴える女子生徒。ベッドで休んでも、表情は青ざめたままだった。「よくなってないね。何かあったでしょ」。養護教諭に問われると、「学校に来たくなくて、母親とけんかした」と答えた。

言葉に力もなく、目はうつろ。「違う何かがある」と感じた養護教諭は会話を続けた。「つらいなら話して」「力になれるかもしれない」。一時間ほどすると、女子生徒の目から涙がこぼれた。「薬を結構、飲んだ。現実逃避したかった」

友達との関係、自分を責める気持ち、夜に眠れず苦しかったこと…。養護教諭は耳を傾け、ノートに書き留めた。

保健室で休んだ女子生徒の体調は、昼ごろに回復し、担任が母親に連絡して迎えに来てもらうことになった。「薬を飲んだことは絶対、言わないで」。女子生徒に泣いて頼んだ。

担任は別室で母親に経緯を伝えた。学校と家庭で連絡を取り合い、見守っていくためだった。

養護教諭はその後、一週間ごとに女子生徒の様子をノートに記録した。「出席できているが本調子ではない様子」「クラスの友達から強い言葉が時折ある」。廊下で「元気にしてる？」と声をかけると、「大丈夫です」と返ってきた。

三学期の終わりが近づいたころ。「大きな変化なく過ごせている。生徒との会話も笑顔でできている」。ノートの記録はそこで終わっている。卒業してから連絡はない。「今は心から笑えているだろうか」。養護教諭が気にかける女子生徒はこの春、高校二年生になる。

寒空のもと、夕暮れの下校。「オーバードーズ」で体調を崩した女子生徒も、この道を通った＝東海地方で

子どもを守り、迷子（ロストチャイルド）を置き去りにしないために

ご意見・体験談をお寄せください

LINE　友だちに追加してください

メール
kodomo@chunichi.co.jp

ファクス
052(201)4331

〒460-8511（住所不要）
中日新聞社会部
子ども取材班

中日新聞　2023年1月5日（木）社会面／27面記事
なお、この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

中日新聞　（第3種郵便物認可）

受験圧 手放せぬ端末

ロストチャイルド 第1部 保健室から

4 依存

長方形の液晶画面を指先が滑る。入力した命令に応じて、キャラクターが動きだす。中部地方に住む小学六年の男子児童は、学校で貸し出されたタブレット端末に夢中になっていた。

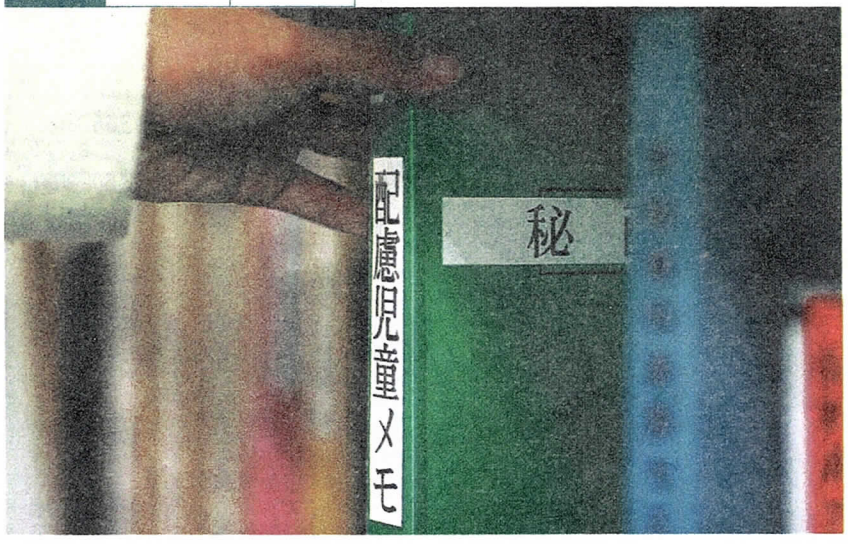
プログラミング教育のアプリ。ゲームを作ってインターネット上で公開すると、体験した人から「いいね」とほめられる。「もっといいものを作りたい」。夕食や風呂の時間も忘れてのめり込んだ。

タブレットを手放せない理由は、他にもあった。没頭している間は、中学受験に向けた塾での勉強のことを忘れることができた。

昨年の夏休み明け。「おなかが痛い」と保健室に来た男子児童は、養護教諭に訴えた。「勉強、苦手なのにやれとお母さんに言われる。ゲームやタブレットを取り上げられて、イライラする」。前日も大げんかし、「復讐したい」と言うほど気持ちが高ぶっていた。

一学期から、保健室によく姿を見せていた。ただ、元気に雑談しては教室に戻っていく姿に、養護教諭は来室の理由を測りかねていた。

「勉強についていけない。塾に行きたくない」。男子児童の言葉で、養護教諭は納得した。受験のための塾通いを強制される「受験圧」が苦しさの源だった。ケアが必要な子どもを観察して記録する「配慮児童メモ」のファイルを取り出し、男子児童の名前を書き込んだ。



ケアが必要な子どもの様子などを記録する「配慮児童メモ」＝中部地方の小学校で

タブレットやゲームを「唯一のストレス解消法」と言う男子児童。不満をぶちまけると、教室に戻った。だが、下校したはずの夕方、今度は保健室の入り口に立って、泣いていた。

「帰りたくない。もう死にたい」。養護教諭は落ち着くまで話を聞き、母親に迎えを頼んだ。

次の日。今度は母親から連絡があった。「タブレットを取り上げたら、きょうだいの端末を奪って使っていた」。男子児童は、止めに入る母親に鉛筆を投げたり、暴れて壁を壊したりするようになっていた。

途方に暮れる母親に、養護教諭は塾通いの見直しを提案した。だが母親は、通わせ続けることにこだわった。母子の生活を支えてくれる祖父母が中学受験を望んでいたためだった。

「このままでは依存から抜けられない」。養護教諭は担任らとチームを組み、塾に行ったらタブレットやゲームを三十分できるという「ご褒美ルール」をつくった。守れなかったら母親が学校に連絡し、担任が指導する。これ以上、親子の衝突は避けた方がいいとの判断だった。

だが、効果はなかった。男子児童は「どうせ後で塾に行くから」とタブレットに没頭。「もうルールを破っている」と開き直って夜中も続け、朝も起きられないまでになった。叱られることだけが増えていった。

二学期の半ば。男子児童は一人で校庭をぐるぐると歩き回っていた。声をかけた養護教諭に「どうしたらいいか、分からない。助けてほしい」。今までにない、率直な訴えだった。

養護教諭は、専門家の支えが必要だと考えていた。医師や心理士らの支援を受けられ、親にも助言してくれる児童相談所がいい。母親に電話し、「児相に連絡してください」と告げた。

年末年始、小学校最後の冬休み。男子児童は塾の冬期講習に申し込んだ。児相のカウンセラーによる面談が始まったが、ゲームやタブレットは手放せない。もうすぐ三学期が始まる。三月の卒業が近づいてくる。

子どもを守り、迷子（ロストチャイルド）を置き去りにしないために

ご意見・体験談をお寄せください

LINE
友だちに追加してください

メール
kodomo@chunichi.co.jp
ファクス
052(201)4331
〒460-8511（住所不要）
中日新聞社会部
子ども取材班

中日新聞　2023年1月6日（金）社会面／29面記事
なお、この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

新聞　（第3種郵便物認可）

刻む痛み 消えぬ悩み

ロストチャイルド 第1部 保健室から

5 自傷

昨年十一月、中部地方にある中学校。午後の休み時間に二年生の女子生徒が保健室に駆け込んだ。「先生、やばい。血が止まらない」。左の手首にあてがったトイレットペーパーに、赤い染みが広がる。

「またやっちゃったの？」。養護教諭は救急箱からガーゼを取り出し、傷口を押さえる。女子生徒は一年生の時から、自分で手首を切るリストカットを繰り返している。「思ってたより深く切っちゃって、自分で止血できなかった」

養護教諭が包帯を巻く。「何かあったの」と問い掛けると、女子生徒は答えた。「二学期の期末テストの結果が悪くて。親友ともけんかしてるし。トイレに入って、ついやっちゃった」

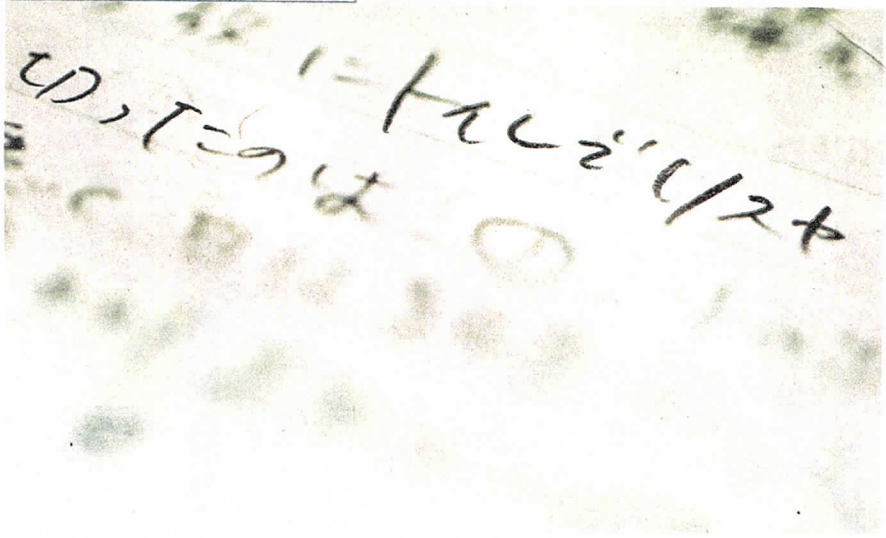
手当てを終えると、女子生徒は平然とした様子で教室に戻った。養護教諭は手元のノートを開き、「トイレでリスカ」と書き込んだ。

全校生徒、約三百人。養護教諭がノートをもとにパソコンで打ち込む保健日誌には、毎月のように自傷した生徒に対応した記録が残る。

左手に傷があるのは、この生徒だけではない。同学年の女子生徒も、保健室で養護教諭と雑談を重ねる中で、自分からシャツの袖をまくって傷を見せた。細く赤い線が刻まれていた。当時の保健日誌には「欠席して家にいた時に、左腕前腕内側に無数のリストカット」とある。

この女子生徒は、友人関係の悩みを抱えていた。クラスの人気者に好かれようと近づき、反対に嫌われた。校外学習で、別の班に入ろうとする級友を強引に引き留め、けんかになった。トラブルを重ねるうちに孤立し、自らを傷つけるようになっていた。

「トイレでリスカ」。生徒の自傷行為を記録した養護教諭のノート＝中部地方の中学校で



腕の傷に気付いた母親は、娘を責めた。「私も苦しい思いをしたけど、乗り越えてきた。リストカットするなんて、自分が弱いから」。女子生徒には、学校でも家でも、心安まる時間がなかった。

養護教諭に手首を見せた時、女子生徒は「居場所がない。落ち着くことができないのがつらい」と漏らした。やらない方がいい、とわかっていた。「けど、やると嫌なことを忘れられる」

保健日誌には「性」に悩む生徒の記述もある。体は女で、心は男という性同一性障害。制服やトイレ、体育の授業などで性別を意識すると、左右の眉毛を抜く。「性別の違いが当たり前の学校生活がつらい」。保健室に来ては、訴える。

一瞬の痛みで、目の前の苦しみを和らげようとする生徒たち。養護教諭は声に耳を傾け、「苦しかったね。自分を責めなくてもいいよ」と声をかける。

自傷を放置すれば、命に関わる行為につながる。その時は嫌なことを忘れられても、抱える悩みを消せるわけではない。でも「やめなさい」とは言えない。その言葉が、さらに生徒を追い込むことになると思うから。

「手首の傷は手当てができても、自分を痛める子どもたちには心の傷がある」。見えない傷を、どう癒やしたらいいのか。養護教諭は考え続けている。

＝第一部終わり

（取材＝北島忠輔、四方さつき、中崎裕、多園尚樹、写真＝今泉慶太、潟沼義樹）

子どもを守り、迷子（ロストチャイルド）を置き去りにしないために

ご意見・体験談をお寄せください
LINE 友だちに追加してください
メール kodomo@chunichi.co.jp
ファクス 052(201)4331
〒460-8511（住所不要）
中日新聞社会部
子ども取材班

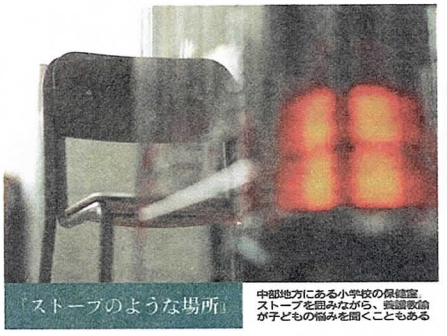
中日新聞　2023年1月28日（土）26面全ページ記事
なお、この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

ロストチャイルド

第1部「保健室から」総集編

子どもを守り、迷子（ロストチャイルド）を置き去りにしないために

息苦しさを抱えて生きる子どもたちを追う連載「ロストチャイルド」。第1部「保健室から」（1月1～6日掲載）では、学校の保健室を舞台に、教室に行けない児童や自らを傷つける生徒の姿を伝えた。養護教諭が対応する課題は多岐にわたるが、大半の学校で配置は1人だけ。増員に向けた国の動きは鈍く、各自治体が工夫して独自に配置しているのが実情だ。＝QRコードに連載



中部地方にある小学校の保健室。ストーブを囲みながら、養護教諭が子どもの悩みを聞くこともある

養護教諭 1人では限界

「保健室の先生」として、校内でのけがや病気、健康相談などに対応する養護教諭。「子どもの心を温めるストーブのような場所にしたい」。ある小学校の養護教諭はそう話るが、不登校や虐待、新型コロナウイルス対策などの業務も担う複数配置は、小学校が常勤の人数は生徒八百一人以上の場合は三人以上、中学校は生徒八百一人以上が条件。全国養護教諭連絡協議会などは拡充を求めているが、国は二〇〇一年以降、基準を変えていない。

本紙が昨年十二月に行った全都道府県と政令指定都市の教育委員会へのアンケートでは、基準の緩和などによる増員が必要と認識している教委が九割を超えた。このうち八府県と七政令市は独自に基準や制度を設け、養護教諭を追加配置していた。

名古屋市は、国の基準を満たす小学校十三校、中学校七校とは別に、小学校十一校と中学校八校に配置している。市教委の担当者は「いじめや虐待など問題が多様化し、子どもが多いほど十分に対応できなくなる。市の予算の範囲で追加している」と話す。

独自基準や制度がある自治体の取り組み

（本紙アンケートから、中部・北陸関係分）

		常勤/非常勤
愛知県	2012年度から、前年度に複数配置校で、かつ児童生徒数の減少が緩和措置20人以内であれば2年を上限として複数配置を認容。22年度からは緩和幅を50人に拡大	常勤
長野県	小学校700人、中学校600人程度を目安に、必要度の高い小中学校に配置	いずれも
滋賀県	小学校では3カ月間（1学期間）、800人以上の学校に複数配置。中学校では5カ月間（1学期に加えて9、10月）、750人以上の学校に	常勤
名古屋市	児童数751～850人の小学校、生徒数701～800人の中学校	非常勤
浜松市	国の基準には満たないものの児童生徒数が多い学校や特に支援を要する児童生徒が在籍する学校などに配置	いずれも

私学さらに深刻

国が定める教員の配置基準は公立校が対象で、私立校の養護教諭の配置は、公立に比べて遅れている現状がある。全国私立学校教職員組合連合・養護教諭教職員連絡会の磯村悦子代表＝写真＝は「全国には生徒数が二千人近い学校でも、一年の期限付きの非正規雇用の養護教諭が一人という例もある」と指摘する。

同連絡会は国の学校基本調査を基に、養護教諭の全国の配置状況をまとめている。二〇二一年度の調査では、公立小中学校とも常勤の養護教諭が一校に一人以上配置されていたが、私立は小学校が全国の二百四十一校に二百十三人（88・4％）。中学は同七百七十八校に対し、四百十七人（53・6％）にとどまった。職村代表は「人件費を抑えるため、勤務日や時間が限られる非常勤職員を充てている学校が少なくない」と説明する。

文科省初等中等教育局の担当者は「私立は公立と違い、それぞれの建学の理念もあり、具体的な学校の運営内容は学校法人の考え次第」と説明する。

磯村代表は「公立でも私立でも、養護教諭は子どもたちの健康に気を配り、成長を見守ってきた」と強調。一貫して「少子化対策」を掲げる政府に対し、「子ども施策を最優先とするなら、大きく遅れている私立の養護教諭の配置実態に目を向け、改善してほしい」と訴える。

子の悩み多様化 自治体が独自に増員

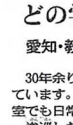
保健室に来た生徒たちが作った折り鶴。養護教諭によると、向かい合って話すより、折り紙などをしている時の方が悩みを打ち明けやすいという＝愛知県内の中学校で

名古屋市を除く市町村の教員人事を所管する愛知県は、国の基準で複数配置となった学校を対象に、年度替わりで児童・生徒数が基準を満たすかどうかを判断している。県は国の基準を満たしたが中学校計五十六校に加え、七校で複数配置された。学校ごとの必要性や時期に応じて配置する自治体も多い。長野県は、小学校で六百七百人以上、中学校は六百人以上を目安に、学校ごとに必要性を判断している。浜松市は支援が必要な子どもがいる学校に再任用の養護教諭を追加で配置する。

滋賀県は健康診断などで多忙な時期に限って任用、県教委の担当者は「一年間を通して配置したいが、予算的に難しい」と打ち明ける。

独自の基準や制度のない石川、福井両県も、市町村からの要望に基づき配置するケースがあるという。

心の問題に深く向き合うために 複数人必要



ことう・ひとみ　北海道出身。愛知教育大学院修了。博士（医学）。愛知県内の公立小学校で養護教諭として勤務後、北海道教育大助教授、愛知教育大教授、同学長を歴任。2021年1月から現職。

養護教諭の複数配置はなぜ必要なのか。メリットや課題は。拡充を求める一般社団法人日本養護教諭教育学会の後藤ひとみ理事長（前愛知教育大学長）に聞いた。

◇

頭痛や腹痛などを訴えて保健室に来る子どもたちの中に、発達障害や、家族や友人との人間関係などの心理的な問題を抱えているケースが増えている。一人一人との深い関わりが重要であり、複数配置の拡充は個別対応のためのゆとりを生み出してくれる。児童・生徒五百人に対し養護教諭一人の配置が適当というのが現場の実感だ。

国は、子どもの課題を解決する効果的であれば学童を付けるという姿勢。養護教諭の複数配置がなかなか進まない背景には、メリットを事例では示せても、成果を数値で表しづらいという難しさがある。

複数配置によって、子ども一人にかける時間が増えれば、表情などの観察や会話を通して、見えてくる背景がより深く多面的になる。そうすれば、子どもが抱える課題の改善、解決への手だてが見つけやすくなるというメリットがある。文部科学省が示す「令和の日本型学校教育」も、個に応じた指導をうたっており、複数配置の拡充はその流れに沿ったものでもある。

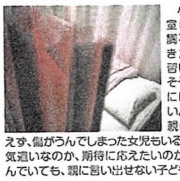
複数配置のメリットを最大化するには、子どもへの対応や保健室経営などでの連携体制を学ぶ機会をつくる必要がある。養護教諭は長い間、忙しくても一人で奮闘してきた。複数配置された場合に、どう仕事を分担し、情報を共有するかという経験の蓄積は、現場での個々の養護教諭の努力に委ねられてきた。今後は研修を制度化し、大学でのカリキュラムにも組み込むべきだ。

連載ダイジェスト

①葛藤

愛知県内の住宅街にある小学校の保健室で、5年生の女子児童が両手に顔をうずめていた。授業は始まっているが、教室には足が向かない。理由を尋ねる養護教諭に、「どうしてって聞かれても分からない」。養護教諭は「分からない子が大半」と語り、子どもたちの訴えを受け止める。

②巡回



小学校の保健室に、男児が体調不良でやってきた。放課後の習い事にも行けそうにないが、親には伝えられない。足の痛みを親になかなか言えず、傷がうんでしまった女児もいる。遠慮なのか、気遣いなのか、期待に応えたいのか。心や体が痛んでいても、親に言い出せない子どもたちがいる。

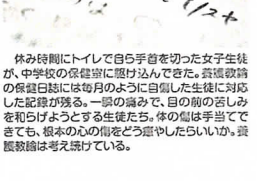
③逃避

インターネットで「薬を飲むと楽になる」と勧める動画を見た女子中学生。学校での友人関係などで苦しさを感じ、「自分なんかこの世からいなくなればいい」と思い悩む夜などに、薬物を過剰に摂取するオーバードーズを繰り返すようになった。副作用で体調不良になり、訪れた保健室で養護教諭に「現実逃避したかった」と打ち明けた。

④依存

タブレットにのめり込む小学6年の男子児童は、保健室で中学受験のための塾通いの苦痛を訴え、「辞めたくない」と言うした。家ではタブレットを取り上げられて暴れる男子児童。どう対処していいかわからず、途方に暮れる母親。養護教諭は児童相談所への連絡を勧め、冬休みを迎えた。

⑤自傷



休み時間にトイレで自ら手首を切った女子生徒が、中学校の保健室に駆け込んできた。養護教諭の保健日誌には毎月のように自傷した生徒に対応した記録が残る。一見の傷みで、目の前の苦しみを和らげようとする生徒たち。体の傷は手当てできても、根本の心の傷をどう癒やしたらいいか。養護教諭は考え続けている。

連載を読んで

笑顔で迎えたい、でも

福井・養護教諭の女性（48）

福井県で養護教諭をして20年になります。私が勤務する小学校は児童約200人の小規模校ですが、教室に入れない児童や少しだけ入れる別室登校児童、登校を渋る児童が多くいて、対応に追われています。

家庭の事情や発達上の特性もあると思いますが、記事にもあったように学校や教室に入れない理由が分からない児童が多い。学校という集団生活の中でどうサポートし、どんな力をつけていくべきか、そのために私たち学校に1人しかいない養護教諭に何ができるのか、悩む毎日です。

教室に入りづらい子とのやりとりは、とても時間がかかります。他の業務が滞ったり、担任や管理職と相談する時間が十分に取れなかったりする日も少なくありません。どんな時も笑顔で子どもを迎えたいと思っていますが、時間も体も足りないと感じています。

どの学校でも見る光景

愛知・教頭（元養護教諭）の女性（55）

30年余り養護教諭をして、今は教頭をしています。連載の内容は、どの学校の保健室でも日常的に起きている光景です。

巡回しながらも保健室に来て不調を伝えられる子どもは、まだ救われます。自傷行為をする子どもが100人いたら、自分から助けを求められるのは4人だけという統計があり、保健室にも来られない子どもの声をどう拾うかが課題です。

担任の中には、自分のクラスの子が保健室に通ったり、担任に話せない話を保健室でしたりすることを嫌がる人がいます。養護教諭も「担任にどこまで情報を伝えるか」と悩むことがあります。

目の前の子どもたちは社会を映す鏡です。オーバードーズ（薬物の過剰摂取）やリストカットの低年齢化も喫緊の課題です。保護者の方にも、自傷への対処法や、子どもの話を「聴く」とはどういうことかを知ってほしいと感じています。

「頼っていい」励まされた

愛知・専門学校生の女性（19）

連載に登場する子どもの気持ちに共感しました。私もアレルギーをきっかけに高校1年から頻繁に保健室へ行くようになりました。両親のけんかが多く、夕食の時間も遅くて生活リズムが崩れ、体も心もつらい状態でした。限界になりそうになったある日、「少しだるいので休ませてください」と保健室を訪ねると、養護教諭が「何か悩んでいることない？」と声をかけてくれました。秘密を守り、肯定的な言葉で気持ちを受け止めてくれました。

今もつらくなると「誰かに頼ってもいいんだよ」という養護教諭の励ましの言葉を思い出します。子どもたちの気持ちに寄り添い、少しの変化にも気付ける保育者を目指して頑張ります。

保健室登校 娘は断られ

名古屋・主婦の女性（54）

高校生になった娘が小学生のころ、登校できたり、できなかったりを繰り返しました。教室にいることがしんどくなったら、保健室しか行き場はありませんでした。

ある日、学校を休むことに抵抗を感じていた娘から「誰かに頼ってもいいんだよ」という言葉を受け止めてくれました。

学校でのけがや病気、虐待や暴力、新型コロナウイルス対策などの業務も担う複数配置は、小学校が常勤の人数は生徒八百一人以上、中学校は生徒八百一人以上が条件。全国養護教諭連絡協議会などは拡充を求めているが、国は二〇〇一年以降、基準を変えていない。

本紙が昨年十二月に行った全都道府県と政令指定都市の教育委員会へのアンケートでは、基準の緩和などによる増員が必要と認識している教委が九割を超えた。このうち八府県と七政令市は独自に基準や制度を設け、養護教諭を追加配置していた。

名古屋市は、国の基準を満たす小学校十三校、中学校七校とは別に、小学校十一校と中学校八校に配置している。市教委の担当者は「いじめや虐待など問題が多様化し、子どもが多いほど十分に対応できなくなる。市の予算の範囲で追加している」と話す。

窮屈な思いする子 心配

愛知・会社員の男性（53）

連載4回目の「依存」で、タブレットを手放せなくなった男子児童が「校庭をぐるぐる歩き回る」姿に不安を覚えました。

今年の1月、学校から「登校しませんか」と電話や手紙が届きました。学校の対応は今も納得できず、深い傷の一つです。

じていた娘から「保健室で過ごしたい」と言われ、学校にお願いしました。午後に学校から電話があり「保健室登校はやってないから、今後はやめてほしい」と告げられ、学校が子どもを拒否する現実に打ちのめされました。

登校できなくなり、1カ月ほど過ぎたころ、学校から「登校しませんか」と電話や手紙が届きました。学校の対応は今も納得できず、深い傷の一つです。

教育システムが進化すればするほど「こうしなければ」が多くなり、子どもは窮屈な思いをしている。一方、親からすれば、標準的なことから逸脱したり、脱落したりするのは、とても心配なことだと思います。

長い人生では苦しみがつきものです。組織内の競争やパワハラなどにより、孤独や不安に悩み、飲酒やギャンブルにのめり込む依存症は多い。大人の世界でも同じような気がします。

ご意見・体験談をお寄せください
LINE　友だち追加
メール　kodomo@chunichi.co.jp
ファクス　052(201)4331
〒460-8511（住所不要）
中日新聞社会部
子ども取材班

取材・北島忠帰、西方さつき、中崎裕、多賀尚樹、写真・今泉慶太、勝沼義明、紙面構成・岩田忠士